不動さつき保育園（社会福祉法人さつき会）目黒区

■ 基本情報

所在地	東京都目黒区下目黒5-18-4
運営主体／種類	社会福祉法人さつき会／小規模保育事業
施設規模	●0歳児：6人　●1歳児：6人　●2歳児：7人
特色・理念・目標など	【保育理念】 ■ 保護者が安心して子供を預けることのできる保育園の運営に努めます ■ 明るくのびのびとした生活の中で基本的生活習慣が身につく保育を基本とし、柔軟で発展的、又一貫性を尊重した「計画のある保育」を実践します ■ 保育行政に従い常に危機管理能力を高め続ける事のできる保育士の育成に努め、地域の一構成員という意識の下、地域との連携を図り地域貢献を積極的に行います 【保育園の特色・力を入れていること】 ■ 子供の「ありのままの姿」を受けとめ、丁寧な言葉かけや援助を行うことにより、子供の様々な欲求を満たし生命の保持及び情緒の安定を図れるよう努めている。また、発達過程や興味・関心を慎重に見極め、子供が主体的に行動していける「待つことのできる保育」「刺激を与えられる環境」を重視。特に午前中の活動は自然と関わりながら体をしっかり動かすことを大事に捉え、保育士が創意工夫をしながら保育に当たっている。
園の周辺環境	●都心の住宅街の中にある小規模園。周囲に自然豊かな大小の公園が点在する
実施クラス	1・2歳児クラスを対象に実施

■ 導入研修での様子

近隣の自然環境の中で身体をしっかりと動かすことを意図的に取り組んでいるとのこと。その「環境を通しての保育」に迷いや悩みがあるとのことだった。乳児における「子供主体の関わり」がわからないという話もあり、“養護”としての援助と子供の意思の尊重の両立に難しさを感じている様子だった。自然環境の中での子供たちの姿を通して子供の主体性を観察しながら、小規模保育としての良さを活かせる保育を一緒に検討していくことを確認した。

■ 事前視察の様子

もともと散歩に出かけることが多く、自然環境を身近に感じている様子だった。小規模園で子供の人数に対し保育者が多く、必然的に関わりが多くなってしまう様子が見られた。1～2歳児合わせて9名という少人数だが2クラスに分かれていたため、1クラスにして縦割り保育にすることを勧めた。保育者が子供を遊ばせようという意識が強く子供との距離が近すぎる様子で、かえって子供たちの姿が見えにくくなっていることが窺えた。実際に保育の中で、子供の行動への対応の悩みもあったため、過保護になりすぎずに小規模園だからこその丁寧な保育とは？ということを話し合うことが大切と思った。

活動同行1回目

2023年10月19日 9:15-11:10［林試の森公園］

公園の入り口の階段で、子供たちは両手をつきながら1段1段自分で登っていた。途中転んでいたが、自分で立ち上がり、再び登る姿があった。保育者は、視察時の「一歩引いてみること」というアドバイスを意識した結果、関わらないという姿になっていた。1歳児は不安定な場面もあるので手を差し伸べておいて、子供が必要ならつかまれるようにしたら良いと伝えた。

1歳児低月齢の子供2人と2歳児1人が、道の脇にある葉っぱや柵のロープなど、あちこちに興味を持ちながらゆっくり歩いていた。保育者は、その子供たちの発見を見守りながら、先頭と離れてしまい、迷っている様子だった。また先頭の保育者も離れすぎてしまったため、どうしようか迷っている様子だった。こうした保育の中での迷いについて、保育の振り返り等で保育者同士で話し合いながら対応を考えることが大切。

広場の真ん中で、保育者が子供とどんぐりで遊んでいると他の子供たちが集まってきた。保育者は子供たち自身が遊びを見つけて広げ、楽しむ姿を見ることができ、保育者がどっしりと構えて遊んでいると、それに子供たちが引き寄せられてくることを感じたようだった。また、一人だけ遠くに行ってしまいがちの子供を追いかけ過ぎないように見守っている保育者がいた。

保育者の感想

- ●関わり過ぎないように、いろいろ考え、一歩引いてみることをやってみたが、まだうまくいかない難しさを感じた。
- ●子供たちがいろいろ見つけて、先頭と間が開いてしまい、早く行きたい気持ちもあったが、子供たちも発見があり、邪魔したくない気持ちもあった。
- ●ぐるぐると走り回っている子が、見えないところに行ってしまわないか不安があったが、保育者が見えないところまではいかない様子だった。
- ●子供の遊びにどこまで入っていったらいいのか、そのときの声かけはどうやった方がよかったのか迷う時があった。

アドバイザーからの振り返りのポイント

- ●みんなの輪の中で遊ぶよりも好奇心旺盛で一人飛び出してしまう子供の対応について、保育者は意図を持って関わることも大切。意図的にみんなの中にHくんの存在を入れていく、Hくんの中にもみんなの存在を入れていくという関わりをしてみてはどうか。
- ●子供主体の関わりを意識するあまり、保育に迷いが生まれ、子供を見守り過ぎ、引き過ぎてしまっていた。保育者が遊ぶことも時には必要。1歳児と2歳児の遊びを保育者がつないでみると遊びが盛り上がることもある。遊び始めたら引くなど引き際を考えてみると良い。
- ●日々のちょっとした迷いも振り返り共有しながら、保育者も主体的に考えていくことを提案した。また、意図を持って子供と関わることや保育者同士の連携、2歳児と1歳児の動きのギャップにどう対応していくかが次の課題。

活動同行2回目

2023年11月27日 9:30-11:15［林試の森公園］

木の隙間で遊ぶ姿

予定していた場所の手前で、木と木の間から顔を出してお家ごっこやいないいないばぁをしたり、2歳児の女の子が木登りをしていた。リーダー保育者は先に進みたい様子だったが、子供の姿を見て“ここで遊ぼう”と切り替えた様子が見られた。この場面を観察していた保育者から「子供の心の声が聴こえてくるようだった」というコメントがあり、子供から少し離れて観察してみることで子供の姿を深く捉えることができることをみんなで共有できた。

長い棒大好き！

自分の背よりも大きい枝を拾い持ち上げる1歳児や太くて長めの棒を持って落ち葉の山に刺してみたり、掃除機のようにしていたり、桜の木に打ちつけて棒の表面がボロボロと落ちるのを楽しんでいる2歳児の姿があった。枝や棒を使って遊ぶ姿の対応の違いなどについて話し合った。「危ないからダメだけではなく、子供が棒とどう向き合っているのか、子供の状態はどうなのかを冷静になって判断する必要がある」という意見などが出てきた。

子供が保育者に落ち葉をかけたことをきっかけに、保育者同士で落ち葉をかけ合い追いかけ合う姿に。子供と一緒に葉の上に寝転んだりして本気で遊んで笑う保育者の姿に、子供たちも惹きつけられていた。その傍で、小枝と落ち葉を使ってお店屋さんごっこをしている2歳児がいた。低月齢の1歳児も、その遊びの一部に関わって遊んでいる姿があり、異年齢の関わりが見られた。

落ち葉で遊ぶ子供たち

保育者の感想

- 木に登ろうとするMちゃんを見て真似をしようとするSちゃん。一生懸命自分の好きな遊びを見つけて遊ぶ姿に、1人1人の心の声が聞こえてくるような気がした。
- 棒を使って遊ぶ姿に、危険だから止めた方が良いのか、棒が楽しいという子供の気持ちを受けとめたいという感情があり悩んだ。棒だからダメではなく、子供がその時、棒とどう向き合っているのか、子供の状態はどうなのかを、冷静になって判断する必要があることを感じた。
- 子供と一緒に葉っぱをシャワーのようにかけ合い、葉っぱまみれになりながら保育者自身も子供たちと楽しい時間を共有できた。

アドバイザーからの振り返りのポイント

- 子供たちは全体的に落ち着いていて、子供同士の関わりも増えた。前回話題になったHくんの中に友だちの存在を意識させていく対応にしたことで他の子との関わりが増え落ち着いていた。
- 保育者の子供との距離感や関わりが程よく、見守る姿と一緒に遊ぶ姿の両方が見られた。より子供の姿を捉えるために、「子供の声を聴く、自分の声も聴く」の実践について話した。
- 棒の扱いについて、みんなで認識が違っていたが、子供の姿を振り返り、深く考えることができた。いつもなら持たせないとのことだったが、子供の姿を見ながら遊ばせてみたらどうか？と提案した。ルールではなく、子供の姿を見ながら柔軟に対応していけるのは、小規模だからこそできる。子供たちが棒や枝を使った遊びを経験していくことで、扱いに慣れ、危ない場面はあまり見られなくなってくる。
- 大人が落ち葉で思い切り遊んだり、道すがらナンテンの実を見つけて喜んだりする大人の姿が素晴らしい。

活動同行3回目

2023年12月20日 9:30-11:20［林試の森公園］

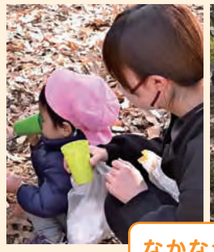
遊びながらお散歩

子供たちが木の実と小枝で遊びながら目的の場所を目指す。後ろの方の子は、葉脈だけになった落ち葉に興味を持ち、拾うことを楽しんでいた。先頭と離れていたが、子供たちの興味や遊びに寄り添いながら緩やかに目的地を目指す姿が良い雰囲気だった。保育者は子供の気持ちが切り替わるタイミングを計っていたことが、振り返りの時にわかった。

保育者と子供たちが穴の中の土を棒や手で掻き出していたらハサミムシが出てきて驚いていた。その後、白い細長い虫が出てきてそれをみんなで観察することに。保育者は虫が苦手とのことだったが、「その虫は大丈夫」とアドバイザーが伝えると、チャレンジして捕まえて虫を見せていた。他の子供たちや保育者にも体験を共有できた。

ハサミムシいた！

大人も子供も興味津々



なかなか気持ちが切り替わらない

お茶を飲むことで切り替えてから帰ろうとしたが、1歳児の子供たちは遊びが楽しくて誘ってもなかなか来なかった。保育者は子供が遊んでいるところにお茶を持っていき、遊びたい気持ちに寄り添いながら、みんなの方へ促そうと試行錯誤していた。先にお茶を飲み終わった子供たちは保育者と遊んで待っていたが、なかなか来ない1歳児と早く集まった2歳児とのテンポの違いが現れた場面だった。

保育者の感想

- 枯れた落ち葉に興味を持ち、遊びに集中して離れてしまった子がいた。気持ちが切り替わるのを待とうと思ったが、切り替わるタイミングをうまく探れなかった。
- 土を掘っていたら虫が出てきた。虫は苦手だったが、子供たちが興味を持っていたので、一緒に観察し、共有した。
- 子供たちが色々なことに気づいたり、大人が予想していなかった遊びを見つけて楽しむ姿が増えてきて、五感を使って遊ぶ子供に気づかされることが多いと感じる。

アドバイザーからの振り返りのポイント

- 視察の時と同じ場所へ行ったこともあり、以前と比較して、子供たち自身でよく遊んでいる姿が見られた。子供が成長していることもあるが、保育者の関わりが変わったことで、子供が興味をより広げやすくなったと感じた。子供の声がよく聞こえてくる保育となった。
- 毎回アドバイスを踏まえて保育を変え、子供に寄り添う保育に転換したからこその課題が見えてきた。どこまで寄り添うのか、どこまでOKなのか、その迷いが子供に伝わり、子供たちは気持ちの切り替えが難しくなっている様子であった。子供の気持ちを乗せながら、楽しく場面転換する方法を試行錯誤していってほしい。園内研修で、子供の気持ちを受け取りながら切り替える術をロールプレイしてみんなで考えてみるのも良いと伝えた。子供の気持ちや状態がよりわかりやすくなると考えている。

活動同行全体を振り返って

同行1回目

事前視察時のアドバイスをもとに、見守り保育を実践したところ、かえって子供たちと距離が離れ過ぎてしまった。子供たち一人一人は遊んではいるが、保育者の関わりが薄くなってしまっていた活動だった。また一人走り回る子供の対応についても検討した。

見通しの良い広場での活動

同行2回目

目的地へ向かう途中、子供の様子を見て、予定を柔軟に変更しながら行うことができた活動だった。子供たちとの距離感もよくなり、大人自身も自然を楽しむ姿が出てきた。枝を持って遊ぶ体験をさせるための安全管理について検討した。

木々や落ち葉に触れながら遊んだ活動

同行3回目

落ち葉や小さな虫など冬の自然を感じる遊びが体験できた活動だった。子供の声を聴き、遊びに気づく関わりができていたが、寄り添い過ぎてしまった。子供たちにどこまで寄り添うか、切り替えのポイント等について話し合った。

子供も保育者も冬の自然に気づいた活動

保育者の振り返りコメント

副主任Yさん： 子供を引っ張らないとと思って子供に介入し過ぎていたが、子供の力を信じることで、余裕が出てきた。大きな変化としては、（集団に居られなかった）「Hくんの中に友達の存在を入れる」というアドバイスに納得し、日頃意識したことで、変化成長があった。今までの振り返りは反省だったが、今は「あの時迷ったんだよね」と細いところまで共有することで、保育を考えていけるようになった。1歳児の関わりが難しいと感じていたが、振り返りで「1歳児面白い」という感想を聞き、自分も子供の感じていることを見てみようと思った。

Mさん： 事前視察では保育者がピリピリしていたが、同行3回目では自由にさせることができるようになっていた。立てたねらいを「させなくちゃいけないこと」と思ってやらせていたが、子供を信じていいんだと思い、子供は自分の限度がわかっていることに気づいた。大きな括りの中で、遊びに応じて関われるようになった。子供と一緒に楽しもうと思う。アドバイスを受けて合同保育にしたことで、2歳児の友だちとの関わりが増え、手伝ったり引っ張ってくれるようになった。

Kさん： 最初は守ろう、遊ばせようという意識が強かったが、自然物を介して、自分も「え?不思議」と楽しいと思えることが増えた。こうした自然の中での発見は、保育士だからこそ体験できると思った。合同保育をした時は、1歳児が一緒に活動することに「一緒に入れてくれてありがとうございます」という気持ちだったが、やってみて2歳児にも良い影響があり、Win-Winだということが振り返りでわかった。保育士同士で話すことで心を開く時間になり、迷いから抜け出すことができた。

園長Nさん： 子供の姿の捉え方が事前視察では守りでガチガチだったが、子供を守るために手を放すということを知った。保育士の専門性としての子供の理解はわかっているが、保育士だからこそ子供の姿の先がわかるのだと思う。捉え方を大きくすることで子供の姿に気づくようになり、子供自身がいろんなことをできるようになった。ねらいについても、今まで「達成に向けて頑張る」ものだったことを先生自身が気づいていたのがすごいと感じた。

アドバイザーまとめ

担当：野村直子／補佐：元木もも子

活動の特徴と意図

- 子供との関わりの距離感を考える。
  子供たち自身でできるところを見極め（任せるところは任せる）、成長を観察すること
- 自然の中での見守り保育の実践。子供の声と保育者自身の声を聴くこと
- 引いて客観的に見るという新しい視点を保育者に提供し、保育者間での連携を図ること
- 縦割り保育で異年齢での保育の試行錯誤

▶活動を通じて見られた子供たちと保育者の変化

- 子供たちを「守ろう」「遊ばせてあげよう」という意識から、保育者の子供たちとの距離が非常に近かったが、「子供自身で遊べている」ということに気づいたことで、子供との距離感が近過ぎず、遠過ぎず、ほどよくなった。
- 縦割り保育に変えたことで、1歳児のトラブルが減り、落ち着いた。
- 集団から飛び出す子への関わりを変えたことで、その子から他の子へ関わる姿が見られるようになった。
- 保育者自身も子供たちと一緒に自然を感じ、楽しむようになった。
- 子供の姿が保育者についていくという姿から、個々の興味が広がってきた。そこから他の子へのつながりも出てきた。
- 保育者の表情や言葉から、不安がなくなり、自信がついてきた様子が見られた。

アドバイザーの振り返り

本園の課題は手厚く丁寧な保育が裏目に出て、関わり過ぎてしまっていたことでした。

縦割り保育にしたことにより、配置的な余裕も生まれ、自分たちの保育のありかたや子供たちとの距離感を客観的に捉え、改善していくことができたように思います。また、日々の振り返りを行うようになったことで、保育者間で日々の悩みや保育の話など対話量が増え、保育がより面白くなってきたのではないでしょうか。

それぞれの保育者の中に、道筋が見えつつあるのが伝わってきました。保育者の変化が子供の変化にもつながっていると感じています。また、後輩保育者が自分の意見や感じたことを共有できるベースができたことも、この園の成果とも言えるのではないでしょうか。

園として「見守り保育」に変えていきたいという強い思いと保育者の皆さんの真摯に取り組む姿勢が、保育の質の向上につながりました。短期間で違いを作ったことに、自信を持ってほしいと思います。さらに保育者がこれまでの保育のやり方や考え方にとらわれることなく、新しいアイディアや個々の感性を入れていくことで、保育がより面白くなり、より良い保育へとつながると思っています。

小規模だからこその丁寧な子供への寄り添いや育ちへの見守りが可能になっていくと思っています。フットワークの軽さを活かしつつ、保育者間で対話を重ね、「みんなでどんな保育をしていきたいか」を考え続けて行ってほしいと思います。

日ノ出町保育園（社会福祉法人朝陽会）足立区

■ 基本情報

所在地	東京都足立区日ノ出町15-1
運営主体／種類	社会福祉法人朝陽会／認可保育所
施設規模	●0歳児：15人　●1歳児：20人　●2歳児：24人 ●3歳児：30人　●4歳児：40人　●5歳児：40人
特色・理念・目標など	【保育理念】 ■ 子供一人一人を「一人の人間」として尊重し大切に育て、保育を通して子供、保護者、職員、地域の人も育ち、豊かな心を持つ 【保育園の特色・力を入れていること】 ■ 体育あそび・音楽あそび・英語あそび・コーデネーショントレーニングなどを近隣園の中でもいち早く取り入れて行ってきた。 今年度より食育に力を入れて進めている。
園の周辺環境	●静かな住宅街の中にあり、近隣には公園も多い。徒歩圏内に広々とした荒川土手が広がる
実施クラス	2歳児クラスを対象に実施

■ 導入研修での様子

全クラスの担任が数名ずつ参加し、それぞれがどうしたら自分のクラスでできるだろうか？ということを考えながら前向きに参加してくれていた。「多人数だから、一斉保育になりがち」「この園でどうやって子供主体の保育をすすめて行ったらいいのか」という発言が多くあり、集団が大きい保育園における子供主体の保育の実践について検討が必要ということがわかった。また、限られた自然環境の中でできることを学びたいとのことだった。

■ 事前視察の様子

子供たちが落ち着いて穏やかにゆったりとした雰囲気の中で過ごしている様子が印象的で、保育者同士の連携がよく取れている様子だった。クラスリーダーを中心に、子供の発達段階に合わせた生活の流れを作っているとのことで、子供の姿をよく捉えた流れのある保育だった。子供たちも安心して過ごしていることが見てとれた。一方で、保育者が考えた活動に子供たちが参加している様子ではあったため、子供の個々の主体性が生まれる活動へと保育の枠を広げていけると良いと感じた。

活動同行1回目

2023年10月17日 9:50-11:10［荒川土手］

保育者と子供たちがおしゃべりを楽しみながら歩いており、急かす様子もなく、子供の興味に寄り添いながら散歩をしていた。途中、保育者が金木犀の匂いに気づき子供に嗅がせたかったがスルーされてしまったとのこと。しかし保育者が「いい匂いだな」と気づいたら、子供たちにつぶやいてみるということが大切。保育者の体験が自然に伝わっていくことで、いずれ子供たちの体験にもつながるだろう。

植え込みの“迷路”に潜り込み、生き物探しや枯れ草や棒を使った遊び、お化けごっこやトトロ探しなどの遊びを展開。初めは入っていくことを躊躇していた子も次第に楽しくなり、自ら道を見つけて潜り込んでいた。保育者も一緒に中に入り、楽しんでいた。枝が危なかったという声も挙がったが、実際には子供たちは自分で枝を腕で避けて歩いている姿もあり、自ら危険を避ける力があることを確認した。

帰る時間、いつの間にか集まっていた様子が印象的であった。「子供の気持ちを第一に考えたときにどんな声かけがいいか意識している」とのこと。全体に向けて「帰るよー」ではなく、一人一人に「おなかすいたね」などの言葉をかけて集まっていた。子供の様子を見ながら丁寧に促しているため、うまく気持ちが切り替わっている様子であった。

保育者の感想

- ●移動中の道端の金木犀の匂いを、子供にも気づかせようとしたがうまく伝えることができず、子供の関心を向かせることができなかった。
- ●植え込みの中を迷路のようにして遊んだが、生い茂る木の枝に危なさを感じた。また死角が多かったので、全体を見る人を立てるべきだった。
- ●植え込みの中で、子供から見える目線と大人が見ている目線の違いを感じ、子供の目線で一緒に虫などを発見することの楽しさを感じた。
- ●帰る時にスムーズにまとめることができるように、遊びの後半から、声かけに昼ご飯の話を入れながら、帰ることに意識が向くようにしている。

アドバイザーからの振り返りのポイント

- ●保育者が気づいた自然物の匂いや子供が見つけた虫をどのように次につなげたら良いのかという質問から、保育者が何か教えたりすることよりも、まずは一緒に体験することの大切さを伝えた。2歳児はまだ知識につなげる必要はない。
- ●保育者が子供の遊びに入って遊んでいる姿はよかったが、子供たちの世界ができてきたらスッと引くことも大切。
- ●散歩中、穏やかで応答的な関わりだったが、園に帰ってきてからの関わりにギャップがあった。園の中でも、子供自身でできるような流れを作り、子供に委ねてみることを勧めた。
- ●問いかけを“オープンクエスチョン”（答えがYES、NOではない問いかけ）にすることなど、取り組んでみることになった。「バッタ見た人～？」よりも「何かいた～？」というような問いかけにすることで、子供一人一人の個性が出てくる。

活動同行2回目

2023年11月15日 9:45-11:30［柳原千草園］

子供の興味が向くようなものがある道を選んで、商店街を通り目的地へ向かっていた。それにより、子供たちのおしゃべりが弾み、楽しみながら歩いていた。子供が面白いものを見つけるとみんなで立ち止まり、他の子供たちも見ることができるように配慮しながら進んでいる様子で、街を楽しむお散歩となっていた。

保育者が公園に着いてすぐ、落ちている木の実に気づいて、匂いを嗅いだりと興味を示すと、子供たちも木の実を拾って楽しんでいた。匂いを嗅いで面白かったという前回の体験が保育者の中に残っていて、それからは匂いを嗅ぐ姿が子供たちにも広がっているとのこと。保育者自身も面白がりながら楽しむことで子供たちの体験も促されていた。

柵に囲まれた細い道をぐるぐると自由に歩いて過ごした。場所に慣れており、子供たちがどんぐりやみかんなどを自ら見つけて拾うことを楽しんでいた。保育者が子供の気づきを待ち見守る自然な姿が印象的だった。「自分で拾うことが楽しいから体験させてあげたい」という思いを、それぞれの保育者が持ち、一致している様子だった。

保育者の感想

- 公園に向かう道に商店街の通りを選び、楽しみながら歩けるように工夫したことで、子供たちの会話も弾んだと感じた。
- 危なそうなところでは保育者が気をつけるようにし、子供への注意の声かけを減らすよう意識して、行動を制限しすぎないようにした。
- 行き慣れている公園で、ドングリがあることを知っていたので、着くとすぐにドングリ拾いを始める子が多かった。
- 落ちている木の実の匂いをかいで子供にも感想を伝えた。子供も興味を持ち、一緒に嗅いで、変な匂いも楽しい体験になった。

アドバイザーからの振り返りのポイント

- 散歩中、保育者が注意を促す声が少なく、子供自ら前の子についていこうという気持ちになるように穏やかに関わる様子がよかった。また子供が見つけた面白いものに立ち止まりみんなで見る時間を作っており、後方の子へも配慮があった。
- 保育者が匂いに着目して楽しんでいる様子があった。それを見た子供たちは、手をつないだまま木の実拾いを始めたので、その場面では「手を放しても大丈夫だよ」と声をかけても良いと感じた。
- 今回の活動では、子供が周遊して遊ぶ姿が多く、ゆっくり留まってじっくり遊ぶ場面があまりなかった。じっくり遊べるような場所の想定もあっても良いかもしれない。
- 帰る前に水分補給をしたことで、帰り道しっかり歩けていたとのこと。ほっと一息つける時間としての水分補給で、気持ちが切り替わる。

活動同行3回目

2023年12月13日 9:50-11:00［千住旭公園（太郎山公園）］

近隣の自然物を観察しながら、ゆっくりと散歩。保育者があらかじめ見つけていた柿の木や夏みかんをみんなで立ち止まって見たり、子供たちの目線の高さにある、植木の赤い実や落ちていたみかんなどを自分たちで見つけて楽しんでいた。またクリスマスの装飾を見て喜ぶ姿もあった。近隣の植木や装飾物などを楽しむ散歩だった。

広場で子供たちがすぐにそれぞれ遊び始めていた。保育者と追いかけっこをしたり、落ち葉に興味を持ち拾ったり、土の中から何か出てくることを期待して穴を掘ろうとする姿などが見られた。また、ベンチの下の土が、雨水が垂れた後に丸く凹んで模様になっていることに気づいた子供が「おおかみのあしあとだ！」と言ったことから、近くにいた子供たちと保育者であしあと探しをしていた。子供たちの中で空想の世界が広がっていることが見て取れた。
子供たちが桜の樹の根っこを伝って、バランスをとりながら樹の周りをぐるぐると歩いて遊んでいた。不安定になると木に抱きついたり、そばにあったネットにつかまりながら、転んでも再度やってみるなど、小さなチャレンジを楽しんでいる様子だった。

保育者の感想

- いつも通っている道なのに、気づかないで通り過ぎていた。歩いている途中に、子供達の目線で見える花や実を見つけ、色々な発見があり楽しめた。
- 普段は急ぎ足で公園に向かってしまうが、ゆっくり歩いたことで、子供たち1人1人に新たな発見があった。
- 慣れている公園なので、子供は何があるかをわかっている。かくれんぼしたり、落ち葉を拾ったり、それぞれが好きな遊びを自分で見つけて楽しむ姿が見られ、子供自身が自分の好きな過ごし方を選択できる環境の大事さを実感した。

アドバイザーからの振り返りのポイント

- ゆっくり散歩をやってみて、子供の目線だからこそ見える木の実に大人が気づいたという感想があり、子供目線で楽しむ良さを確認した。
- 広場での遊びの時間がたくさん取れたが、途中でシャボン玉を出したことで、子供たちの遊びが切れてしまったように見えた。子供たちはまたそこから遊びを探すことになったため、結果、遊びが深くなったタイミングで帰る時間となり、子供の「もっとあそびたかった」という発言もあった。シャボン玉は必要なかったように思った。
- 子供たちが桜の樹の周りで歩きまわる遊びは、チャレンジ的な遊びだった。保育者がアドバイスせずに見守ることで、子供にとって力試しの体験になる。
- 落ち葉を入れるために保育者が用意したビニール袋が小さすぎて、落ち葉がくしゃくしゃになってしまっていた。落ち葉を入れるには紙袋の方がよい。

活動同行全体を振り返って

同行1回目

迷路のようになっている植え込みに入ったり木の実を摘んだり、子供たちがのびのびと遊ぶ姿が印象的。危険そうに見えるところも子供自身が危険を回避している行動が見られた。帰る時の促しが穏やかだった。

河川敷の迷路のような植え込みでの活動

同行2回目

見通しが悪い場所での自然遊びだったが、子供たちがいろんなことによく気づきながら遊んでいた。保育者自身が自然の匂いなどを楽しみながらも、子供の気づきや体験を大切にしている関わりだった。

散策路で自然を体験した活動

同行3回目

木の実等を探しながら、近隣をゆっくり散策。その後、広場で様々な遊びを見つけて、遊ぶ子供たちの姿があった。子供たちの姿を的確に捉えて道具を出すタイミングを計ることや見守っていく関わりの大切さを確認した。

ゆったり散歩と身近な公園での活動

保育者の振り返りコメント

TKさん： 手をかけすぎていたことに気づき、見守り、子供のつぶやきを聴くようになった。子供たちは、発見したものを子供同士で見せ合い、発信するようになった。

Nさん： この地域で、ゆっくり歩いて周りの景色を楽しむのは難しいと思っていたが、子供がみかんの木を見つけたりするなど、発見できていた。「虫が嫌い」と言っても良いと知った。自然の知識をもっと深めたい。

アドバイザーコメント： 知識がなくても、自然は楽しめる。個人的に自然案内のプログラムやネイチャーゲームなどを楽しむ体験をすることで、その時の自分の体験が保育に活かせるようにもなるので、お勧め。

Oさん： 怪我をしないようにという意識の方が強かったが、子供を見守ることがとても大事だと分かったので、今後も引き続きやっていきたい。できないと決めつけるのではなく、実はできるんだと知った。匂いを嗅ぐなど今まで通り過ぎていたところを楽しめた。

TYさん： 自分たちが当たり前にやっていた子供への関わりが管理保育のようになっていたことを指摘され、当たり前を考え直す機会となった。散歩は歩く距離を伸ばすことと思っていたが、大人も童心に帰って子供と一緒に遊ぶことで、子供と同じ目線を持てた。子供の気づくことに気づけた。

K主任： 大きい集団でどうやって子供主体の保育を行うかが課題だったが、先生たちの意識が変化し、保育が変わった。今後園全体でより良い変化となるようにしていきたい。

アドバイザーまとめ

担当：野村直子

活動の特徴と意図

- 人数の多いクラスで“子供たちが自発性や主体性を発揮できる保育”の検討
- 近隣の限られた自然環境を活用した保育
- 子供に任せる場面や子供自身で行動できることを増やしていく保育

▶活動を通じて見られた子供たちと保育者の変化

- 純粋に自然を楽しみ、より自然に興味を持つようになった保育者の姿が見られた
- 子供たちに「教えなくては」「きちんと伝えなくては」という意識が強い保育だったが、「まぁいいか」と思えるような緩やかさが出てきたように見えた
- 子供たちの自発的な気づきの発言や発見することを喜ぶ姿がより多く見られるようになった。また、保育者が子供たちの気づきにより気づくようになった。
- 戸外から園へ帰ってきた時の保育において、子供に任せる部分を増やしたことで、子供たちを待たせる時間が減り、帰園後の流れがスムーズになった。保育者がきっちりと子供たちを管理する方法から、ある程度子供に任せるようになったことで、子供たち自身で行動できるようになり、姿としても落ち着いた。
- 保育者の子供への関わりが、寄り添い見守るものへと変わってきた。

アドバイザーの振り返り

この園の悩みは「大きい集団で子供主体の保育をいかに実践するか」でした。このような悩みを持つ園は多いのではないでしょうか。人数が多いと、一斉保育になりがちです。園内ではすでに「どうしたら子供主体の保育ができるか」を試行錯誤されているようでした。

事前視察で感じたことは「子供の動きをよく観察できている保育」でした。2歳児ならではの特性や目指す姿などを加味して保育を組み立て、子供たちが流れに乗っている保育でした。その良さを活かしつつ、どのように子供たちの自発性や主体性が発揮できる保育を行うかということが今回の活動のポイントでした。

保育者の皆さんは子供の姿に寄り添い、子供たちとの応答的な関わりを楽しんでおり、子供たちも穏やかで良い保育をしている印象でした。そしてよく連携が取れている様子でした。さらに本事業では、保育者自身も素で自然を感じて楽しむ大切さを伝えました。子供たちに知識を伝えたり、道筋を作り込む必要はありません。保育者が自らの姿や行動を見せることで子供たちの興味も引き出せるでしょう。

集団が大きいからこそ、子供に任せる部分を増やし「大枠の流れがあれば大丈夫」という気持ちで保育をすると、余白が生まれ、より子供たちのユニークな発想が出てきやすくなります。子供自身で探究したり、チャレンジしたり、試行錯誤できる関わりと、環境設定（環境や場所選び）や保育を行うことで、子供たちの自発的な遊びが増えてくることと思います。そうした子供たちの姿を楽しんでほしいと思います。

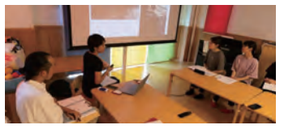
キッズラボ西馬込駅前保育園（キッズラボ株式会社）大田区

■ 基本情報

所在地	東京都大田区西馬込1-29-5
運営主体／種類	キッズラボ株式会社／認可保育所
施設規模	●0歳児：6人　●1歳児：12人　●2歳児：12人 ●3歳児：23人　●4歳児：23人　●5歳児：23人
特色・理念・目標など	【保育理念】 ■ 生きる力をはぐくむ 【保育園の特色・力を入れていること】 ■ 食育を中心に子供たちのやりたいだけではなく、原体験を大切にした保育を実践している。食育として子供たちと相談して決めた野菜などを育て、収穫、調理、食べるまでを行っている。 ■ 子供たちが好きな虫などの観察、飼育を活発に取り入れ、写真だけではなく本物に触れる経験を大切にしている。
園の周辺環境	●すぐそばを通る国道１号線をはさんで静かな住宅街が広がり、住宅街の中に緑と遊具が充実した公園が点在する。
実施クラス	5歳児クラスを対象に実施

■ 導入研修での様子

原体験となるような活動を大切にしているとのことで、研修中も子供たちと一緒にやったことや様子が話の中に出てきて、様々な取り組みを行なっている様子だった。散歩では、遠くまで出かけており、普段の保育の中でも戸外によく出ていることが伝わってきた。子供主体の保育については、すでに保育者が試行錯誤しているが、これでよいのかと進める上での迷いがあるようだったため、実際に活動に同行しながら子供主体の保育を一緒に検討していくことを伝えた。



■ 事前視察の様子

散歩の道中や自由遊びの子供の姿から、集団としてのまとまりを感じた。また、遊ぶ場所の範囲だけ指定してその中で自由に遊ばせる等、子供たちに対する保育者の提案には選択肢や余白があるため、子供たちが窮屈に感じることなく、伸び伸びと意欲的に遊んでいるように見えた。子供と保育者の間に信頼関係が築かれて築かれているとともに、保育者同士及び保育者と園長等がよく連携できているように感じた。一方、遊び方については、固定遊具や鬼ごっこなどが多く、固定化しているようだった。自然を活用しながら、子供たちの意見や発想を取り入れ、遊びの場所や方法などの選択肢を増やせると良いと感じた。

活動同行1回目

2023年11月8日 10:00-11:40［大田区立中央5丁目公園］

今回の活動の意図は「友達と一緒に体を使って遊ぶ」ことだったので、アスレチックや斜面がある公園を選んでいた。子供達はアスレチックや斜面・すべり台などで、意欲的に体を動かしていた。保育者は立ち位置を確認し合う等、声をかけ連携することで安全に配慮しながら、子供たちがより自由に過ごせるように考慮していた。

公園までの道中で、魚屋のシャッターが閉まっていることに気づき「まぐろ屋さん、休みだね」と会話する子供がいた。公園に到着後しばらくして、落ち葉や石を使って、寿司に見立てて遊び始めた子供がいた。日頃・その日の体験や友達との関わりからイメージが広がり、遊びに発展していったようだった。

色とりどりの落ち葉で
お寿司やさんごっこ

これ、はこびたい！

大きな枯れ木を見つけて、友達と協力して運ぶ子供たちがいた。「あ、クモがいる」「クモさんのお家なんだよ。だから運ぶのをやめよう」などと興味深く観察したり、想像を膨らませて話し合う姿があった。保育者は安全に配慮しながら、子供たちの会話を聞いていた。

保育者の感想

- ●遊具のネットクライムでの遊び方が、以前はただ登って降りるだけの遊びだったが、今日はモグラたたきに見立てていたり、ターザンロープも友達と協力し合って、いろんな遊び方で楽しんでいると感じた。
- ●子供たちが遊具の陰になっている場所を秘密基地と言い出し、どんどん集まりだした。そうした楽しそうなところをつなげて、遊具ではなく自然の方にも促したいという気持ちもあった。
- ●夏の頃に比べ、友達のことを気にすることが増えたと感じる。気にする分、言い方が強くなって言い合いになったりすることがあるが、1人で遊んでるような時が少なくなった。

アドバイザーからの振り返りのポイント

- ●リーダー（ターザンロープの場所）とサブ（秘密基地ごっこをしているアスレチック横）の立ち位置を逆にした方がよいのでは。危険度が高く目の離せないターザンロープにサブがつくことで、リーダーは全体を把握するとともに、子供の遊びをより観察でき、個別の対応も柔軟にすることができる。
- ●体の使い方や発達をより促すために、アスレチック遊具などの固定遊具のみならず、起伏など変化のある地形で活動することも有効である。
- ●「まぐろ屋さん、休みだね」「ここ、秘密基地みたいだね」など、子供たちのつぶやきを拾い、遊びが広がるきっかけにすると良い。
- ●保育後に保育者間で5分だけでも振り返りを行うことで、子供の姿を捉えたり、意図の共有・次の保育の検討などができる。また、子供たちと振り返りを行うことで、子供たちを知るきっかけにもなる。

活動同行2回目

2023年12月7日 9:55-11:55［大田区立本門寺公園］

「戸外で様々な自然と触れ合って、友達とその発見を楽しむ」という意図を持って活動した。公園到着後、イチョウの葉や地面の穴、木の実を見つけるなど、個々で遊びを発見して楽しむ姿が印象的だった。その中で、友達や保育者に共有したり協同したりする姿が多く見られた。

銀杏の実を嫌がる子がおり、活動が止まる場面もあったが、その子を中心にして他の子たちが解決策を考えるなど、協力し合う姿も印象的だった。各々楽しみながら助けようという試行錯誤の姿が表れており、子供同士のつながりとクラスのまとまりを感じた。

横断歩道を通過する際、前回は保育者の合図で全員が同時に左右を確認していたが、今回は子供一人一人が自ら安全確認をして渡っていた。保育者はその姿を見守り、必要に応じて自ら確認できるように声をかけており、子供たちの危機管理意識の成長がみられた。

保育者の感想

- 歩いている途中に柿を見つけ、そこから子供達の話が広がった。目的地を目指して歩くだけでなく、道中の発見も楽しめる散歩にできないかと思った。
- 銀杏を嫌がる子にかかりきりになり、リーダーのサポートができなかった。
- 銀杏を嫌いな友達のために落ち葉を掃除することが遊びになり、狭い空間の中でも遊びが広がり、子供の発想に驚かされた。
- ボールや遊具で遊びたい子もいたので、声かけを工夫するべきだった。

アドバイザーからの振り返りのポイント

- 今回は園から距離のある公園へ、行き帰りは少し速いペースで歩いていた。その中でも子供たちは「赤い実あったよ」「柿の実だ」など、様々な発見をして会話をしていた。自然物を発見し、友達との会話を楽しむような散歩をしてみるのも良い。
- その日の活動の目的を絞ることで、子供達の気持ちも活動に向かいやすくなると考える。その上で、目的以外の遊びが生まれても柔軟に対応することで、子供達が満足感を得ることができるだろう。
- 「話し合ってごらん」などと、保育者が意識的に子供同士で考え合えるような関わりをしていたのが良かった。
- 予定より遅い帰園だったが、散歩の道中は保育者が焦らず、安全に配慮しながら歩いていた。子供たちも最後までしっかりと歩いていた。

活動同行3回目

2024年1月10日 9:50-11:40［大田区立たぬき山公園］

寿司屋ごっこをする子供たち。葉っぱや石を寿司や寿司屋にある道具、段差をカウンターのように見立てて遊ぶ。子供たちが自然につながり合い、クラス全体に遊びが共有されていた。遊び込めていない子が誰一人いなかった。

公園到着後、さっそくオレンジ色の実を見つけて「これ何だろう」「みかんみたいだね」などと、子供と保育者で話し合う姿があった。保育者はすぐに答えを教えることなく、一緒に考えていた。自ずと探索活動が始まり、それぞれが遊びを見つけ、遊び始めていた。

小石を柵に投げて当てて、音を楽しむ子供たちがいた。保育者は周囲の人に当たると危ないことを伝えつつ、子供たちの発想や遊びを創造する力に驚いていた。そして、その子供たちの姿の中にある内的な動きを見つめようとしていた。

保育者の感想

- 公園の中の1つの区画だけで遊んだが、狭い空間でも子供たちの発想が広がり、新しい発見をたくさんしていた。
- 固定遊具がなくても、子供たちが自分の遊びを見つけて遊べることを感じた。狭い公園で、あそこまで遊びこむ姿を見たのは初めてだった。
- 石をパイプに投げて遊び始めた子供たちがいた。下の広場に人がいたので、やめるように注意するべきか、危なくない違う遊びに誘導できないか悩んだ。

アドバイザーからの振り返りのポイント

- 子供たちが小石を柵に投げる場面で、保育者それぞれが「遊びの保障」と「安全管理」をどう両立するか迷っていた。まず、子供たちの姿から何に関心があるかを考えていく。そして、何が危険でどうしたら安全か、どのようにその遊びを保障できるかなど、関わり方を確認していった。
- 子供のやりたい思いを大切にするには、保育者自身が余裕を持つこと、楽しむこと、少しずつチャレンジすることが大切である。心の余裕と計画のゆとりを持つことで、より子供の姿に合わせた柔軟な活動となる。そのためには、保育後の振り返りや保育者間の情報共有・連携が必要である。

活動同行全体を振り返って

同行1回目

アスレチック遊具で体を十分に動かして遊んだり、落ち葉や石を寿司に見立てて遊んでいた。友達とアイデアを出し合い、協力して遊ぶ姿が印象的な活動だった。

アスレチック遊具のある公園での活動

同行2回目

公園の豊かな自然で、子供達が自発的に落ち葉や木の実を拾って遊ぶ。個々で楽しむと共に、お互いを意識し合いながら集団としてつながり合い、助け合う姿が見られた。

降りそそぐ落ち葉で遊びが広がった活動

同行3回目

一見何もない場所で、自然物に興味を示し、遊びを見つけて遊び込んでいた。小石や木の実を観察したり、お寿司屋さんをしたり、個々の遊びが全体につながり合って遊んでいる姿が印象的だった。

なんでもない場所にも自然を見出した活動

保育者の振り返りコメント

担任Aさん：

- 子供たちが自然遊びを経験することで、遊具の遊びだけでなく、自然遊びの楽しさを感じていた。
- 保育者が活動を引っ張らなくても、子供たちの力で遊びが広がるのだと感じた。そして、その方が子供達のワクワクが強いと感じた。
- 横断歩道を渡る際の左右確認を、大人からの声かけや一斉での実施から、子供たちがそれぞれ自分で確認できるように変更した。進学する前に確認できて良かった。
- 子供たちが自然のある公園で自ら遊びを見つける姿を多く見れたので、今後さらに自然のある公園へ行きたい。

フリーOさん：

- 子供を一歩引いて見ることで、子供たちのつながりが見えるようになった。そういう視線を持たなきゃいけないなと感じた。子供の視野がもっと狭いと思っていたが、子供の視野の広さに気づかされた。
- 子供の主体性より大人主導で活動を進めようとする自分がいた。子供が余裕を持って遊ぶ姿や、自然物一つからでも遊びを見つける姿から、自分が狭い視野で保育をしていたと気がついた。
- フリーの保育士として、担任に合わせようとしていたが、子供の姿の変化から、子供がしたいことと担任のしたいことを合わせていこうと変化していった。子供のしたいことを担任に伝える橋渡しになれたらいいなと感じた。

園長Iさん： 主に事業に関わった2名が「すごく楽しかった」と言っていたことが嬉しかった。去年までこうだったからではなく、今年の子供達はこうだからとか、子供達と相談しながら保育を作ってほしい。

アドバイザーまとめ

担当：久保田修平

活動の特徴と意図

- 自然環境の中で、子供を見守りながら、対話・応答的で、子供たち自身が考えられるような関わりをする。
- 保育者が子供の姿や声をより捉え、さらに子供の内面の変化を見つめようとする。
- 子供自身が遊びを見つけ、遊び込み、集団としてつながっていく。その姿から保育者が気づきを得る。
- 振り返りで子供の姿や保育の課題、次の活動の意図を把握し共有する。

▶活動を通じて見られた子供たちと保育者の変化

- 事業に参加する前は、子供たちは固定遊具や鬼ごっこなどで遊ぶことが主であったが、自然環境を活用しながら保育を行うようになった。
- 子供たちが遊びを広げる姿に保育者たちが驚き感動し、保育に柔軟性や余白を持たせようと意識するようになった。自然物に目を向けたことで、子供たちの遊びがより個性的で豊かなものに変化し、子供同士でつながり遊びこむ姿が見られるようになった。
- 一斉に行っていた横断歩道を渡る時の確認を、子供一人一人が左右の安全確認をして通過する方法へと変更した。それぞれの子供が確認・判断することで、個々が危機管理意識を持ちやすくなった。
- 保育者が自分たちの保育を振り返り、より子供たちが主体性を持って活動できるようにと意識を変化していった。
- 保育者のリーダーとサブの役割の連携が変化した。特に、フリーの保育者がより担任の意図を理解しフォローしながら、子供たちの思いも尊重しようと変化していった。そのことで、より保育を共に進めることができ、子供たちの遊び込む姿が生まれ、つながり合っていった。

アドバイザーの振り返り

本事業を行っていく中で「子供を信じる」「子供に託していく」という思いが、保育者に表れていったように思います。それは、一見自然物が乏しい場所でも、子供たちが自発的に遊びを見つけ遊び込む姿に、保育者が驚き感動したからだと思います。その経験から、保育活動の意図を持ちながらも、子供の今の姿を大切にしようと考え、「まぁ、いっか」と保育を柔軟に変更するという方向へと、意識が変化していったようです。これは、大切な気づきだったと思います。保育者が以前「自分の言葉の多さ」に気づいて、それからは「子供たち自身で考えられるような関わり」を目指し始めたとのことでした。保育者が自分の保育を振り返り改善することで、子供の姿にも現れてくることを認識しました。

また今回、担任保育士とフリー保育士の連携の重要性も見えてきました。特に、フリー保育士がより担任の意図を理解しフォローしながら、子供たちの思いも尊重しようと意識を変化させていったことが印象的でした。引き続き、保育の振り返りを実施し、子供の姿を捉え、保育者間の連携を深めていってもらいたいです。

今回の経験を通して、「保育者が保育を楽しむこと」の大切さをさらに実感しました。子供たちに保育の枠を広げてもらうくらいの「柔軟な心もち」と「チャレンジ精神」を片手に、保育を探求していってほしいと願っています。そして、自然環境が決して豊かとは言えない中でも、保育者が保育に余白を作ることで、子供たちの豊かな遊びが生まれ、子供同士つながり合う様子は、他園にも参考になると考えています。